

の専攻の勉学よりも、自由に好きな勉学・読書が可能であった時代が、今から考える

と非常になつかしく、また得難い時代であったと思います。

私のうけた一般教育

稲葉 二 柄

「一般教育」とか「教養科目」とか言っても、それがどうであったか私にとってであったか、単独にそれだけを離して考えるのは難しい。少くとも、私にとって大学は、私の受けた教育の全体は、そして今の私は、というような問いを無くしては本当のところははっきりしないように思う。しかし、このようにあからさまに自分自身のことを問いつめることは容易でないし、あまりおもしろいことでもない。以下には一般教育ということと関連して想起される極く断片的な私の記憶を綴ることをお許しいたきたい。

普段は戸棚の奥に放ってある大学卒業証書と教職免許状を出してみた。この二つの証書は、卒業してすでに10年余りの母校と私とを今なお確かに結びつけており、その関係ははずしては私には受けた教育も研究も無いものになってしまう。しかし、その母校もやがて筑波大学に「統合」されて廃学になろうとしている。これはまさに私の受けた教育が廃止されることなのであろう。

教職免許状の裏書には私が大学で修得した単位の内訳が記されてある。総数174、一般教育44、教職専門14、教科専門80、その他36。「その他」とあるのは卒業に必要としなかった単位だが、これは一般教育で余計に修得したものである。つまり私は、およそ80単位におよぶ一般教育科目の受講をし、単位を修得した。単位を認定されな

かったものもいくつかあったから、実際に受けた教育は更にそれよりも多い。

私は特別に多く受講し、欲張って単位をあさった訳ではない。大学が教養課程を置かなかったこともあり、受講の機会が多くあったということと、周辺の雰囲気がある程度であり、私もそれに習ったし、あれも知りたいこれも聴きたいと思っている内に、自然と多くの受講をすることになっただけである。実際、私には気をそられる講義が多かった。

一般教育を私は教養という側面では、むしろ専門科目の補説として、周辺学問領域の概説として受講するということが多かったように思う。国文学の専攻であったので、人文科学の分野で気の向くままにできるだけ多く受講した。これが結果的に前述の如く多くの修得単位を生んだ理由だが、日本文学の講義などは、半ば他流試合を挑むような気分が良い評価を得ることを仲間と競ったりした。

家永三郎先生の「太平洋戦争史」の講義は、当時非常に人気を呼び、お隣りのお茶の水女子大学からも、学生がもぐりで聴講に来る程であった。大教室に文字通り満席となり、更には立って聴く者もあったから、黒板の見やすい好い席を取るのは苦勞であった。それまで私達の前には太平洋戦争または30年戦争の歴史的な経過とその意味をまともに論じたものが一冊も無かつ

た。戦後については多くの議論と書物があっただけに、この講義はあたかも歴史の空洞を埋めようとしているかの如くであった。家永先生は後に岩波より『太平洋戦争史』を出版されたが、それを読んでみた時、あのよく通るテノールで一種の抑揚をつけて語られた時ほどの感銘をどうしても受け取れなかった。

教養として必要・必修とされた外国語や人文科学以外の分野の一般教育も当然のことを受けたのだが、これらは必要最少限のものをはかるうじて修得出来ただけで、私自身にもおもしろいと思ったものは無く、それゆえ記憶に残るものも無い。そのみか、社会科学の分野では、卒業年度になっても未修のものが一つ残り、卒業できるかどうかという、首のかかったその講義にも、気が向かないままに大半の時間を欠席してし

まい、最後になって大いに冷汗をかかねばならなかった。特別な恩情をもって処置するという形で救われたが、この恩人とも言ふべき方が、私が卒業した年都知事になられた美濃部亮吉氏である。

書き続ければ思い出は際限がない。ここで私なりのまとめをすると、私の受けた一般教育は日本文学や日本歴史や哲学などに集中して甚だ偏ったものであり、社会科学や自然科学の分野では教養にも知識にもならぬ程度であった。一般教育の本来の目的が全き自己の完成をめざして外面的になされるべきものであるならば、私のそれは満足なものではなかった。しかしこれは自ら選んでそうしたのであり、限られた人文科学の分野内では私は十分に意義のある教育を受けられたと思う。

私のうけた一般教育

上 玉 啓 子

私がうけた一般教養の中で印象に残るものといえばまず、「法学」の講義があげられます。法哲学の井上茂教授の講義は150人の学生がマイクで聴くにもかかわらずいつもシーンとしていました。大学の自治に関する事件やその他当時最も学生間で話題になる事件に関する講義でもあったし、また実際の事件と理論とを結びつけてのあらゆる角度からの法解釈についての講義は、今でも当時のノートをめくってみると、ありありとその内容がうかんできます。法学というのは私にはまるで専門外なのですが、そういう他分野のことに興味を持ったということが大切なのだと思いま

す。もう一つ、変わった講義では歴史学があげられます。前期はナポレオンのことばかりを後期にはいと先生がかわり、日本の家文のことについてだけ話されるのです。当時まだ大学生になったばかりの私は、ずいぶんとまどいを感じたものですが、歴史学なら歴史学という学問を研究するという意味、ある一つの学問をするということはどういうことなのかを初めて知ったような気がしたものです。そして、講義を聞くということは、その先生のもっているもの、その先生が半生を通して体系づけたものまたは体系づけつつあるものを、私たちが吸収してしまうということではないでしょう